

IV 単画派の展開

1. 新案 中根式速記法

複画派全盛の時代、単画派の提案を初めて行った武田に触発されて1914年、中根正親（以下、正親と呼ぶ）が中根式速記法を発表した。続いて、複画派から森山波蔵が1917年8月、2種類の線長を配分した森山式を発表し、国字運動の中から1921年には大川小一郎が大川式を世に出した。さらに高橋鉄雄、鬼塚明治が単画派への転換を目指して方式研究を進めた。



図 2-57 大阪毎日新聞の中根式速記創案の報道記事

武田の単画派発表の刺激を最も強く受けたのが、第三高等学校から京都帝国大学理工科大学土木科へ進むことになる正親であった。熊崎式を独習しながら、ガントレット式、田鎖式、武田式などを分析した正親は、三度ピットマン式に立ち戻って、単画派を開発した。武部は、この中根式を「熊崎式の武田式化である」と評した。図 2-57 の1914年5月10日毎日新聞紙上で報道された中根式速記法は、基礎符号における単画化率が68%（加号符号等を含めて90%）に至り、初めて実用化に進んだ単画派である。

正親は、中根式速記法立案の方針として日本語の構成を(1)漢字で書く言葉と、(2)仮名で書く言葉に大別してそれぞれの処理原則をつくり、(3)単画派の立場をとる一ことを宣言した。

漢字で表記される言葉は音読みされるとき、末尾音にある種の音が付属することは、1887年林甕臣の「一大発明速記大日本字」に「漢語綴字法」の前提として見られる。林は「漢語の語尾音はイウツンキクチツキの九音に定まりたるを、其の音の標字に基づける種々の横線をもて符号とせるものを謂う」と書いている。のちに1937年には貴族院の安田勝蔵が「日本速記法上に於ける漢字音と其の略字法則の研究」において、405種の字音とその構成を明らかにし、これらを対象とする二音文字研究の成果を公にしている。

一方、工学分野では森田正典が日本電気の新型キーボードの特許出願書において、日本語の字音語の尾音に一定の法則性を発見してM式キーボードの発明に至った概要を1987年電子情報通信学会論文誌に報告している。

もっとも、森田以前に、正親は、中根式速記法を発表する際、字音語における5尾音の規則的な出現を根拠にして中核理論となる字音語縮記法のインツクキ法を発案したことを明らかにしていた。それは、かな文字2字以上の読みを持つ漢字は尾音に長音、拗音、インツクキの10音を伴うことから、別に定めた長音、拗音を除いた6音に対する筆記法をインツクキ法と名づけて規則化したものである。

日本語の表記法を漢字と仮名の二型に分けて、正親は大胆に字音語の縮記法と和語の省記法の発想を具体化した。「縮記」とは音を省くことなく画数を減らす表記法で、「省記」は音声を示す符号を省いて書かずに読ませる短縮化をいう。一方、「略記」とは、符号は音に対応させているが、音列として簡単な視覚記号の形態に置き換えて短縮する筆記理論を総称している。中根式において、インツクキ記法の筆記順は、2音目のサイン符号（小円、大円、丸かぎ、角かぎ、有尾小円、有尾大円、楕円）を1音目の線分符号の前の位置に書いて、文字化する際に2音目の位置に戻して読む方法を意味する「逆記」と定義した。例えば図2-58の②の(1)のように、「改選」/カイセン/の漢字の2つの尾音を前に繰り出して/イカンセ/と綴り、反訳の際に/カイセン/と/イ/、/ン/の尾音を正規の位置に戻して読む。このインツクキ法は、[サイン（点画）＋ストローク（画線）構造の特別符号]の生成規則であり、複画派、折衷派における二音文字と同等の処理規則であると下谷政弘は見る。加えて、正親は、図2-58の②(2)のように、ピットマン式の加点母音の原理を加点インツクキとしても取り入れた。

また、仮名つまり訓で読む言葉については、音読みに変えてその符号を書く音訓換記法を適用した。その理由として訓読みよりも音読みの方が音数は少なくなり、省画化が図る利点があると見た。

日本語の動詞の活用については上中下の三段法を用いて、現在形、過去形、未然形を示す規則的な筆記法を設けた。また、ピットマンの表記法を取り入れて、活用語尾の表記に加点法を設けて、見た目の複雑さと筆記負担を大幅に削減することにした。

<p>① 助詞 (1)</p> <p>ハ、バ' ス カ ニ ノ フ</p> <p>モ テ デ ト カ タ、シタ</p> <p>ズ、セズ ニ ヲ シテ、ジテ、ナ</p> <p>助詞 (2)</p> <p>ニハ ニモ テハ デモ トガ' トテ</p> <p>トノ トハ トモ トモニ トト トトニ</p>	<p>② インツクキ法 (1)</p> <p>イ ン フ チ ク キ</p> <p>カイセン カフヤク アチコチ カクリツ ニンシキ</p> <p>○ ● ◯ ◯ ◯ ◯ ◯</p> <p>○ ● ◯ ◯ ◯ ◯ ◯</p> <p>加点インツクキ法 (2)</p> <p>イ イ ツチ クキ</p> <p>イツチ イ イ ツチ クキ</p> <p>ン クキ エン オイ ケイ オツ エン オン セイ オツ</p>	<p>③ 加点法</p> <p>ハレ マシヨウ スル シテ</p> <p>マレ フレ ラレ ズル ジテ</p> <p>シマシヨウ シマシテ マシタ マシタ</p> <p>シマシタ</p> <p>池田正一</p> <p>日本の速記 1957.6号 中根式の例</p>
--	--	--

図 2-58 中根速記学校で指導された主要理論（池田正一）

使用頻度が高い語には、略語を生成する方法として、略記法の最大線、最小線を用意した。中根式初版においてはこのような特徴を備えていた。図2-59の今日残されている正親の直筆文では「ところ」、「こと」で中根式初版にはない符号が書かれている。中根式成立までに17回基礎符号を変えており、初版完成までに用いられた速記符号である。正親の中根式創案を聞いて、熊崎健一郎は「幾多斬新なる法則あるが中にもインツクキの妙用には只管敬服の外無御座候、是等独創的御発明に対し満腔の敬意を表し申候」と正親へ書簡を送ったという。

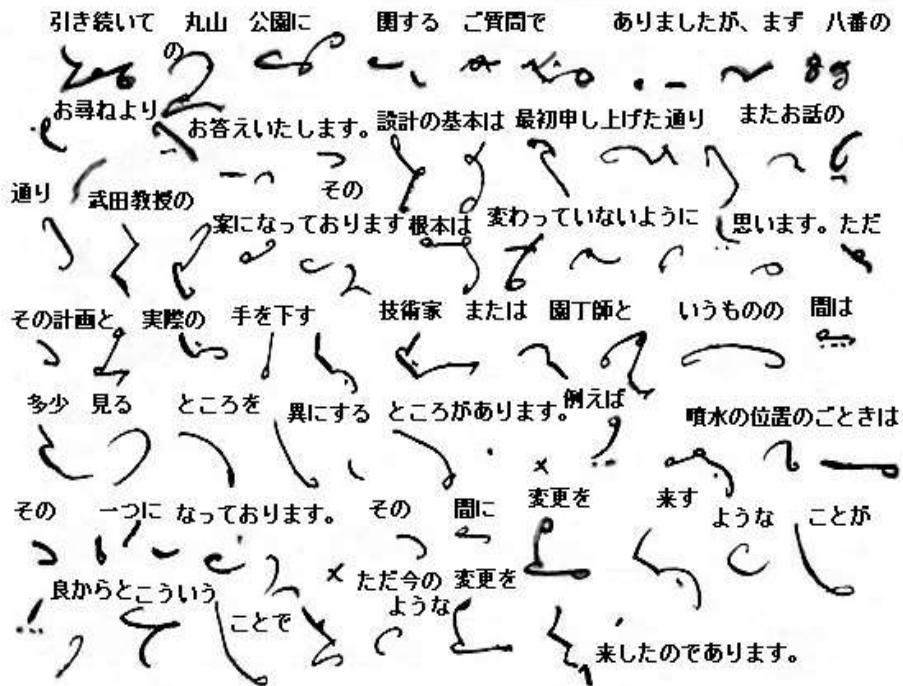


図 2-59 中根正親の直筆文例

正親は速記の普及活動を実弟、正雄（戸籍名正世）へ託し、その後三代目の康雄へ継承されて 2004 年、「ハヤカナ」と名づけられた改良方式が公表されている。図 2-60 に中根式の基礎符号の変遷を示す。中根式の初版と 2 版の違いとしては、[サ行]と[タ]、[ト]の右下向き画線の角度を正親版の 60 度から 30 度と改めている点がある。

ピットマン式との関係は、[K] → 「カ」、[T] → 「チ」、[N] → 「ナ」、[NG] → 「ニ」、[M] → 「マ」が見られ、清音に淡線を充て濃線化して濁音とするほか、ア列音を二倍長くするとオ列音、イ列音を二倍長くするとエ列音とする面で影響が見られると武部は分析した。

正親は早くから教育法（要体教育）の研究、普及に傾倒しており、1914 年 9 月設けた中根式京都速記学校の活動を弟、正雄（戸籍名正世）に委ねた。正雄は中根式の実用化研究を行いながら、旧制中学を対象とした普及活動を全国的に展開した。そうして 1927 年、「通俗中根式速記法」を出版して、1929 年 4 月には東京都千代田区に中根速記学校を設立し、翌年には東京府から認可を受けた。

一方、1931 年に中根速記学校に入学した池田正一は速記を学んだのち、日本大学へ進学し、戦後 1946 年に中根速記学校へ戻って終生速記教育に従事した。池田は、中根式内部の符号研究をまとめていたが、1957 年 6 月に日本速記協会「日本の速記」紙上で「我が式の誇る省略法」（図 2-58）を紹介した。その体系は基本的に正雄が大成した速記理論であった。

正親、正雄の速記理論の構成は、(1) 基礎符号、(2) 濁音、半濁音、(3) 長音、拗音、(4) インツクキ法、(5) 助詞、(6) 上下段法、(7) 節音法、(8) 最大線、(9) 加點法、(10) 加點インツクキ法、(11) 交差平行法、(12) 符省法—とされた。

基礎符号は一種線と二種線の2つの長さを用いて、その生成規則は①ア列×2=オ列、

	アイウエオ	カキクケコ	サシ ス セ ソ	タチツテト
A 中根正親 1914年初版				
B 中根正世 1915年版				
C 中根康雄 2004年版				

	ナ ニ ヌ ネ ノ	ハヒフヘホ	マミムメモ	ヤユヨ	ラリルレロ	ワ
A						
B						
C						

図 2-60 中根式速記法の基礎符号の変遷

②イ列×2=エ列、③ア列の反対または濃くしてイ列、④ウ列はオ列+点、⑤ただし[ク],[ツ],[フ],[ユ]は例外とするものであった。

線分符号の角度は5方向角度(方角)とし、線の両側を分けて正側(水平線は上側、その他の角度は左側)と負側(正側の反対側)の概念を用いることと、線長種は合計4種類とした。(この正側、負側の考え方はピットマン式、ガントレット式に見られ、正親はそれらの影響を受けていた)

濁音は、清音符号を濃線化するほか、[グ],[ブ],[ヅ]は正側中部に加點、半濁音は正側に小半円をつける。

基礎符号の直線は正側、曲線は内側頭部に大丸カギをつけて、ウ列、オ列は長音とし、ア列は拗短音(キャ等)、エ列は拗長音(キョー等)とする。

インツクキ法では、字音語の尾音につく5音を図2-58②(1)にあるサインを逆記する方法を創始した。別に、ピットマン式の加點母音の手法を加點インツクキ法(同図②(2))として用いることにした。

逆記で尾部にサインがつかなくなった結果、助詞を順記(発音順に基礎符号を綴る書き方)によるサインで表し、頭部と尾部で同形のサインを巧みに読み分けさせた。また、助詞に二音のものを設けた。

符号を置く位置を筆記線の上側、下側に置く上下段法では、上段を訓読転化法(音訓換記法)による略語の筆記帯、下段をラ行音を持つ略語を置く帯域とした。

節音法は、和語のような二音字の訓読みから構成される言葉を略語化する方法である。

例えば「やり方」を「ヤ+小丸カギ+カ」と書き、中間小カギ法と呼ばれる。

最大線は、言葉の一音を取り出して長線（四種線）化して一語一線化する略記法である。

交差平行法は、単語から二音を取り出してその線分を組み合わせたか、平行に並べて卓立化や判読性を高める略記法である。

インツクキや拗音、長音のサインを接触、交差、空間表象によって表す略法を符省法と呼んだ。

このような縮記、略記、省記を実行する方法が整えられた。

中根式速記法は、旧制中学校、高等商業学校、戦後は新制高校における課外活動として普及し、最盛時には全国で5,000人規模の速記学習者を擁した。高校生が2年間程度の課外活動で最もよい成績では400字～450字/分に達するという、それまでの方式にない学習性のよさを実証した。

中根式は課外活動として普及した関係で、専門速記者（1962年ごろ日本速記協会所属537名）以外の分野でも用いられてアカデミア関係へも広がり、学術研究のヒアリング調査などに利用されていた。例えば民俗学の岩倉市郎が速記を用いて調査した北陸の結婚儀礼の中根式による速記ノートを立命館大学の真下厚が研究してきたほか、民俗学の川島秀一は柳田国男らとともに口承文芸研究を行っていたが、みずからの調査聞き取りに中根系の山根式速記を用いていた。

また、近年日本教職員組合で偶然に符号原本が発見されることがあり、未解読のまま保管されていた速記原本が歴史研究のため解読に供される事例が出てきた。速記符号は使用者が利用分野、方言、時代などの違いから個人的な変化が生じたり、意図的に改良を加える場合もあり、多様化する傾向があることは第三者解読上で問題がある。

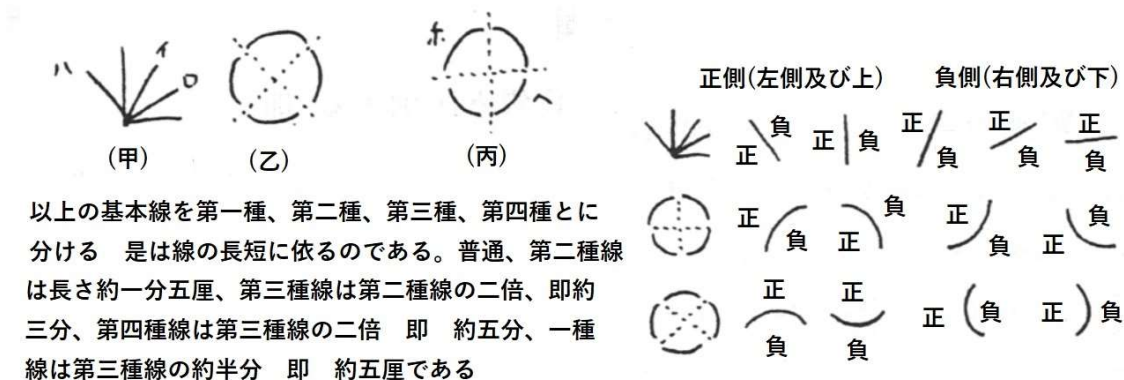


図 2-61 中根式速記法の基礎符号の決まり 中根正親 中根式速記法講解 1916

2. 中根式から広がる多様な研究

中根式は多くの人材を輩出しながら多様な研究を生んできた。北村蘊雄の指導を受けて中根式を学んだ武部良明は、さきに中根式速記法の改良研究書「学生速記」を出版してい

だが、初めて「日本速記方式発達史」を著し、国語速記の理論、文化、方式の発達など、幅広く科学的な研究を進めた。「学生速記」の基礎符号は、中根式の線分符号の角度 5 種を 8 種へふやし、筆記負担のある加号符号を〔ヌ〕だけに減らす一方、同方向異角度線をふやした。

欧米では速記法の理論内容は、個人用途として用いる基礎符号のラテン文字式綴り法の正書法理論と、記録用途の高速度、逐語型の省略理論の 2 階層構造をとっている。一方、日本

	中根式系派生方式	アイウエオ	カキクケコ	サシスセソ	タチツテト
A	国字式 1931				
B	土田式 1934				
C	武部良明式 1941				
D	中根26年式 石村善左 1951				
E	か行曲線符号植田裕 大阪市立西商業高校				

	ナニヌネノ	ハヒフヘホ	マミムメモ	ヤユヨ	ラリルレロ	ワ
A						
B						
C						
D						
E						

図 2-62 中根式系の基礎符号の多様化事例

では議会速記に用いる高速度逐語型用法に力点を置いて研究されてきた。しかし、基礎符号の連綴や縮記規則の運用を中心とする全音記法（発せられた音を省かないで全部書き取る書き方）では速度面に限界があった。そのため、高速度理論の研究においては、頻出度が高い熟語を省略する方法や 2 音節、3 音節単位の特記符号として二音文字の工夫などを運用経験に基づいて改良されてきた。

正親は京大の速記を担当していた松川梅軒の依頼に応じて英文速記練習のために読み手を務めてピットマン式に触れる機会があり、新式设计においてピットマン式に似た符号イメージの実現を目指した。ピットマン式では子音の基礎アルファベット 24 個を画線とし、その生成器として図 2-63 のような 2 種の四分円と 5 種の傾斜から切り出した線分符号が定義されていた。

正親は、画線符号の長さを 4 種とし、一種線（線長 5 厘＝約 1.5 ミリ）、二種線（1 分 5 厘＝



図 2-63 ピットマン式の符号源図

約 4.5 ミリ), 三種線 (3 分=約 9 ミリ), 四種線 (5 分=約 15 ミリ) で構成し, 基礎符号には二種線と三種線を充てた。一種線と四種線は目的に応じて利用する。線分符号の角度はピットマン式のダイアグラムズを採用して方角を 5 種とし A : 60 度(右下方向),

B : 90 度(垂直下降), C : 30 度(右上方向), D : 60 度(左下方向), E : 180 度(水平方向)とし, 一方向へ書くことにした。角度 A は, ピットマン式では 45 度であるが, これを正親は 60 度としたのに対し, 中根式を大成した正雄と, 超中根式へ進む森卓明はそれぞれ独自に 30 度に改めた。

また, 筆記具はピットマン式にならって万年筆が用いられ, 小型の符号を筆記するピットマン式の筆法を再現しようとした。図 2-59 に, 直筆が残る, 正親が運用した符号は小型で緻密なスタイルであった。

森は, 中根式について①基本文字に濃線を用いることは幾何派では常識であり, ②加点は筆運びが鈍るという意見がある, ③頻度が高いサ行, タ行に右下向き線を用いるのを非難する意見があるが, [サ], [タ]の連続は少ないので, 規則によって書かずに表せば簡単に解決がつくはず, ④ウ列加文字のうち最も頻度が高い[ウ], [ス]は等しく苦勞するところ。例えば加文字位置から次の符号を続ける工夫も可能, ⑤ア行に短線, 長線を与えたこと, ⑥[ウ]の長線への加文字も対応が可能, ⑦インツクキの大円と小円をはさんで結ぶと不円滑を生じやすいので, 代用形を考えることと, とした。

中根速記学校で学んで衆議院速記者となった土田利雄は, 1934 年, 改良を加えて土田式を公表した。主な変更は①本来ペンを使用する条件で組み立ててあるが, 著者の実際の経験に鑑み鉛筆を使用する, ②インツクキ法を改めた, ③助詞に大改変を加えた, ④いわゆる和語の一部を縮字した, ⑤速記数字を制定した——点を挙げた。

その基礎符号(図 2-62B)は(1)角度を, 右下向き線の 45 度, 垂直線, 左下向き・左上向き線を 120 度, 同 150 度, 水平方向線の 5 角度に改めた, (2)基礎符号の長さを 3 種類にふやして単画符号の数を多くした, (3)ウ列の加文字符号で[ル]以外の符号を長線化ないしは半円, 開口楕円などを用いて単線化し, [ク]の淡線化と一部の濁音に別種の符号を加え, また一部に加文字ダッシュを設けた。

日本語の速記は 1882 年発表以来, もっぱら高速度逐語型の符号を完成することが目標とされた。その方式から国会速記者の採用試験に合格者を出せば実力が証明されたと言われる時代であった。土田式の登場は, 中根式の評価を高める一方, 既存方式の改良, 新方式の立案を目指す研究が盛んに行われた。

森門下の赤坂薫は 1928 年, 中根系で初めて貴族院の速記者採用試験に合格し, 中根式が逐語用高速度方式として評価を得ることになった。赤坂は単画化研究を始めていた国会速記

者との交流において中根式，超中根式理論を紹介し，官民集まって速記学研究が盛り上がっていった。

3. 単画派への転換と完全単画化への到達

点画が符号式速記の符号素材である。画つまり「画線とは，記線速記方式が速字の形式に利用する，いわゆる線のことである。ほとんど無限の種類の実際に書かれる具体的な線を線條と名づけて，特に有限個の条件によって規定される理想状態ともいうべきものを画線と名づける」と武部は説明する。「点は，連続して線をつくり，場合によって円となる符号の要素である」と，山根祐之は速記符号図形の生成原理を説明した。

利用しやすい録音技術がない時代，高速度にたえる記録型の速記の需要が発生し，文字文化の中で機能性人工文字体系の速記が開発されてきた。それら手書き速記は線分符号を筆記するため記線式とも呼ばれ，速記符号を生成するための線條は（1）幾何的な図形を用いる幾何派，（2）ラテン文字の筆記体の部分を用いる草書派，（3）それらを折衷した半草書派があり，（4）そのほか日本では日本語の文字の筆記を反映した文字派が研究されてきた。（図 2-64）

日本では主流の幾何派においては複画符号から折衷符号へ進化をたどり，理想的な単画符号が速記研究の目標とされた。それは一線に幾つの音韻数を担わせるかを追うものであった。基礎符号の完全な単画化は太平洋戦争後，国字式，山根式において実現を見た。



Speech to Text Transcription Technology

図 2-64 発話を文字化する速記の技術革新の進化

もつとも，複画派系から単画派への転身をはかる動きも高まりを見せていた。図 2-65A のように，田鎖式を修めた森山波蔵は 1917 年，8 方角，長短 2 種の単画方式を公表した。

大川小一郎は 1921 年、「大川式一字一画カナ改造応用速成速記法」を公表した。基礎符号（図 2-65B）に小円、楕円を導入して、中根式にある加点符号をなくしたが、ただ濃線は残した。それに対して、北村貫吾は直線の方向、角度を 6 種にふやし、一方曲線は深い曲がりと浅い曲がりの 2 種とし、濃線は残したものの、すべて一画の線條で基礎符号（図 2-64C）をつくり出した。中根式では [ア] の 2 倍が [オ]，[イ] の 2 倍が [エ] という関係だったが、大川式では [ア] の倍を [エ]，また [イ] の 2 倍を [オ] とする関係に変更した。また、複画の流れで、高橋鉄雄はすべてが一画で書ける、完全単画化の基礎符号を創案した。

一方、中根式においては、菅原登は 1984 年 7 月 2 日発行「中根式速記法体系（上）（中）（下）」において、中根式の主要研究者を中根正親派、中根正雄の中根派、中根速記学校の九段派、稲垣正興派、森卓明派、植田裕派の 6 派を挙げている。

	単画派 純単画派	アイウエオ	カキクケコ	サシスセソ
A	森山式 1917			
B	大川式 1921			
C	北村式 1925			
D	四年式 1929 高橋鉄雄			
E	山根式 1948 山根祐之			

	タチツテト	ナニヌネノ	ハヒフヘホ
A			
B			
C			
D			
E			

	ナニヌネノ	マミムメモ	ヤユヨ	ラリルレロ	ワ
A					
B					
C					
D					
E					

図 2-65 複画派からの単画化研究と純単画化の達成

4. 速記研究における森卓明の業績

中根式で早くから速記理論の研究を進めた一人として、森卓明(1897. 10—1987. 10. 24)がいた。森は、1919年、中根正親が開いた第4回中根式速記法講習会を受講した。以後、先進国の速記理論を研究しながら中根式を高度化して、1931年には超中根式速記法を公表した。その中で、和語の略記について音訓換記法に疑問を感じ、田鎖系の同行縮字法に着目して和語縮字法を工夫し、学習性と反訳性を向上した。

和語縮字法は、和語に同じ母音を有するものが非常に多いことを根拠にして、森は同じ母音を持つ子音を〔カ行〕は小カギ、〔サ行〕は大正円、〔タ行〕は有尾小円、〔ナ行〕は小円、〔ハ行〕は逆大カギ、〔マ行〕は逆小カギ、〔ヤ行〕は大カギ、〔ラ行〕は短小化または長大化——によって省画を図ることとした。その場合、混同を避けるために上段に書くことを原則と決めた。ただし、存在しない音列もしくは混同するおそれのない場合は同列だけに限定しないで、母音全体に応用するとした。さらに、森は外国語縮字法を設けて、あらゆる言葉の符号短縮にも備えた。

森は欧州の速記研究者とエスペラント語を用いて交流し、中根式の進歩、高速度理論の研究を開拓した。基本的な立ち位置として、師の正親への敬意を示して、僧籍にある森は基礎符号を終生変更しないと明言しながら、縮記法、略記法の改良や、比較速記方式理論、速記方式史の研究で業績を挙げ、日本における手書きの符号速記理論の研究をリードした。

欧米の速記先進国における母音の表記法を見ると、加点法が英語圏の正円幾何派、線条または筆記位置のドイツ語圏の草書派、円類サインを用いるフランス語圏の幾何派があり、その中で森は草書派の書きやすさにひかれた。

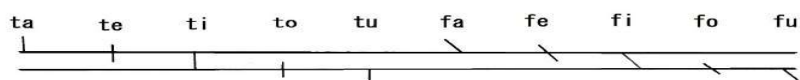


図 2-66 Moat 1833 における母音位置表象法
出典：Navarre Stenography 77p.

1833年、モート Thomas Moat の音節符号(図 2-66)の生成法を見ると、/t/の子音符号を速記ノートの書線の高さに応じて、最上階を/a/、次を/e/、中央階を/i/、4段目を/o/、最下段を/u/とし、それぞれの高さに子音符号を置いた場合、/ta/、/te/、/ti/、/to/、/tu/と読む母音位置表象法が発案している。

幾何派のシンプルさと草書派の筆記運動のよさを組み合わせる視点から、クロス J. G. Cross は、図 2-69 にあるように、垂直線を用いないなど正円幾何派の符号に制約を加える一方、複雑な草書派符号の省画を目指す諸派理論折衷型の幾何楕円由来の半草書派方式を完成していたが、その楕円形の曲線はグレッグ式にも影響を与えた。ただ異なる点では、クロスは符号の筆記ゾーンを5段に分けて、そこに母音と子音を音表象する巧みな仕組みをつくり、符号の一線化と音声負荷の倍加を実現する理論を確立していた。

1872年、フランスのルフェーブル Lefèvre の音表象文例(図 2-67)を見ると、一線化が実

現されている。

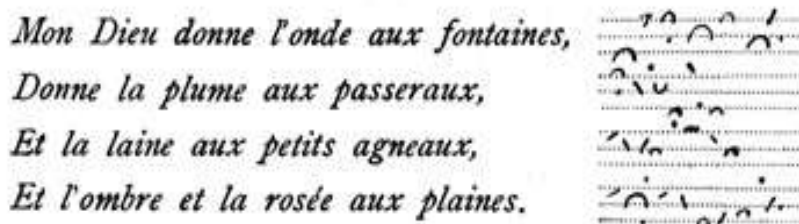


図 2-67 ルフェーブルのポジション式の文例

クロス J. G. Cross は「高速で発せられるすべての音声を完全に書き取ることは不可能である。言葉の中で聞こえてくるすべての音声を書きとめる速記理論はない」と言い、実務上の課題を解決するために、幾何派と草書派の理論から融合が可能な理論を取り出して調和させ、エクレクティック方式つまり折衷型と名づけた。(基礎符号は図 2-69)

速記符号の筆記位置		子音 +	母音 +	+ 母音
1階	above	a au aw	p b	w
2階	on	e eu ew	s z sh	l
3階	across 中心線	i oi oy	m n	r
4階	just below	o ou ow	f v	t d th
5階	Farther below	u oo	c k g qu x	ch j h

図 2-68 クロス式における音表象法

現実に筆記する符号の運動量を減らすために、図 2-68 のように、クロス式でもよくあらわれる子音列に対して 2 文字列, 3 文字列などの特定符号を設け、母音を示す位置に書いて、例えば /p/ を 1 階 (above) に書くと “play” としたり、また、/sp/ を 3 階 (across) に置いて “spy”、/s/ を 4 階 (just below) に書くと “slow” とするような位置による語表象を設定した。

クロス式では母音にもストロークを与え、子音を筆記帯域の 1 階から 5 階の位置に置くと、後に続く母音が変わり、また母音符号を 1 階から 5 階に置くと続く子音を示し、一方同様に 1 階から 5 階に母音を置くと先行する子音を表す規則 (図 2-68) を設けた。

クロスの手法は (1) 濃線化, (2) 長線化, (3) サインの大型化, (4) 短線の短線化, (5) サイン記号の小型化—という複雑な便法を組み合わせ、省画化、一線化を実現する体系であった。

森は「速記文字は早く書けること、すなわち速度を第一要件とする。速度の要素としては“簡単”と“流暢”がある。簡単さと言えば一線より簡単なものはない。そこで、速記文字を発音のとおり綴れば二線以上になるのを、一語を何とかして合理的に一線で表すようにしようというのが線表象法のねらいである」とクロス理論の日本語速記への応用を目指した。

Cross. 1878.	
A	∩
B	∪
C	∩
D	∪
E	∩
F	∪
G	∩
H	∪
I	∩
J	∪
K	∩
L	∪
M	∩
N	∪
O	∩
P	∪
Q	∩
R	∪
S	∩
T	∪
U	∩
V	∪
W	∩
X	∪
Y	∩
Z	∪

図 2-69 クロス式の基礎符号

シンボライズ Symbolize, つまり「表象」する法は, 言葉を象徴させる特定の音声を, 直接にはなく位置関係で付随的に示す音表象と, 複数の線を簡単な一線として代表させるなどの線表象の 2 法がある。表象は象徴と同じ概念で用いられ, 音声や言葉, 意味を示す記号を生成する方法として機能する。

森は超中根式速記法の理論を発展させ, そうして中根式表象速記法を創案した。

近代速記法は音声による言葉を文字の言葉に変換するために中間メディアの速記符号を用いるが, それは必ずしも文字に支配されるものでなく, また音声の支配を受けるものでもないメカニズムで規則的に生成され, 機能する。森の発想はクロス式にあり, ドイツ草書派にも存在する表音主義の縮記, 省略思想であった。ただ, 武部は, 表音といっても, 速記符号の実用上の機能は, 「発話内容を思い出すためのヒントであればよい」と言う。

ところで, 森は 1942 年, 略画法として略符号生成の方程式となる一語一線, 一文一線の着想を公表していた。これは, 超中根式時代に, 中根式における最大線, 最小線が上中下段で用いることを「表象」という用語で示していた概念を線表象理論として規則化したものである。例えば中根式では長音拗音表記法で用いる頭部丸かぎを平行, 交差等の方法によって頭部丸カギなどサインを省略(符省)する方法で, インツクキ法の中でインツクの 4 法を基本規則よりも簡単な形に変更する方法である。

前記の手法は楷書に相当すると森は言う。また, 滑らかでない運筆を一筆化する手法として「草書化」をはかることにした。それは省画とあわせて書きやすさをもたらす効果があった。膠着語特有の助詞の扱いにおいても表象助詞を設けて草書化した。


線表象法においては, 幾何派を対象にした速記符号一線化方程式を設定した。

$$A=f(x)$$

A は導き出される略字, f は最初の音の画線(第一線), x は最後の音の画線(第二線)で, それらの属性によって A が決定される。

また、例えば「経済」、「財政」のような字音語に対して、図 2-70 のように○イ部分を第一種線化したのち、前音つまり頭音だけを取り出して略語化する前音摘記法を用意した。

- (1+1=1の長さ処理の原則)
- (1) 二音節語の前音節、後音節が最短線化できる時、
 - (2) 前音節摘記し、
 - (3) 頭音摘記し略語化する
 - (4) 1+1=1の速記符号化例

経済  $s = 1$
 → ケイ + ザイ ⇒ ケイ


財政  $s = 1$
 → ザイ + セイ ⇒ ザイ

図 2-70 同じ線長の符号における前音摘記法

(略字の線の長さの決定法)

森は使用する速記符号の長さを 4 種類としており、短いほうから番号をつける。

もし、

- (1) $2+2=2$ のように第一線 f と第二線 x が同じ第二種線の長さの場合、A は同じ長さ、
 - (2) 第二線の長さが第一線よりも長い場合、A は第一線を $1/3$ 程度に短くする。 $2+3=1$
 - (3) 第二線の長さが第一線よりも短い場合、A は第一線を一倍半程度長くする。 $3+2=4$
- なお、2 線とも最短の一種線の場合は A の長さは $1+1=1$ の規則を準用する。

のちにこれを、多音節語の一線化へ応用するために追加した。速記者が各人の判断により、句、節、文単位で決めておくことが可能である。

(二線一線化した速記符号を書く位置の決定法)

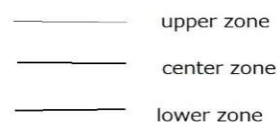
線表象で導き出された略字 A を筆記する位置については、図 2-71 のように、やはり第一線と第二線 (x) の属性に応じて決める。



図 2-71 5 方角でまとめた線分符号のグループ

もし、線分符号の角度について、

- (1) 第二線が角度 a, または角度 b の場合、略字 A を上段に置く、
- (2) 第二線が角度 c, または角度 d の場合、略字 A を中心線上に置く、
- (3) 第二線が角度 e の場合、略字 A を下段に置く、



こととした。(図 2-72 参照)

図 2-72 筆記位置(上, 中, 下)

森は表象理論を完成し、1977年6月1日、方式名を「現代国語表象法」と命名した。

ン	ストローク(線)					tick
音	an	in	un	en	on	清、濁、ラ行
上段	~~~~~					n ˊ ˊ
中段	~~~~~					kn ˊ ˊ
下段	~~~~~					tn ˊ ˊ hn ˊ ˊ

ツ	ストローク(線)					tick
音	aku	iku	uku	en	oku	清、濁、ラ行
上段	~~~~~					k ˊ ˊ
中段	~~~~~					kk ˊ ˊ tk ˊ ˊ
下段	~~~~~					nk ˊ ˊ

ク	ストローク(線)					tick
音	atu	itu	utu	etu	otu	清、濁、ラ行
上段	~~~~~					ˊ ˊ
中段	~~~~~					ˊ ˊ
下段	~~~~~					ˊ ˊ

イ	ストローク(線)					tick
音	ai	ii	ui	ei	oi	清、濁、ラ行
上段	~~~~~					ˊ ˊ
中段	~~~~~					ˊ ˊ
下段	~~~~~					ˊ ˊ

図 2-73 「現代国語表象法」におけるストロークとティック・サイン

現代国語表象速記法では図 2-73 に見られるストロークとティック・サインを駆使することが特徴になっている。その開発の方針を森は、次のように述べている。

- ① 中根式の基礎符号で右下方向へ下がる線を極力使わない,
- ② 母音を書かないようにする,
- ③ したがって母音アイウエオを長音, 拗(長)音の母音とする,
- ④ 母音を位置(段)で表象する,
- ⑤ 父音 consonant 符号をストローク(画線)で設定し, 形はインツクキ法のようなが, 「順記」にした最初の符号が父音 consonant をあらわす,
- ⑥ ア行と同様, ヤラワも書かないことがある,
- ⑦ 最短線(tick, ティック・サイン)を5方向に限り用いること,
- ⑧ 同様に, 最短線の波線を3種用いる(左下方向, 右上がり方向, 左下がり方向),
- ⑨ 線分は長短6種を使い分ける,
- ⑩ 濃線は濁音とラ行に用いる,
- ⑪ この法則を外国語にも応用する。ただし, p と f を定める,

線表象法は、省画化と筆記時間短縮のために、特定の言葉の略語をつくる方法であり、2, 3回出現した場合、臨機に略字として生成する用法であると位置づけている。

音 種		速 字				
母音	短音	a ⁷	i ¹	u ⁷	e [±]	o ⁷
	長音	a ^{±i}	i ⁷ⁱ	u [±]	e ¹⁻	o ⁷⁻
父音	清音	c.k(ク)	t(ト)	f(フ)	p(フ)	s.th(ス) ch(チ)
	濁音	g(グ)	d(ド)	v(ブ)	b(フ)	th(ス) ji(チ)
	その他	r(ル)	m(ム)	n(ヌ)		

図 2-74 「現代国語表象法」森卓明 の外国語用符号

音表象法としては、よく使われる言葉は、書きやすい線構成をとり、一般の略字として設定する。その場合、短線（ティック・サイン）を初音の特定符号として設定しておき、慣れた線や運筆を多用できるようにつとめた。そうすると同形の符号が同じ段に出現するリスクが高まるので、尾音が濃線の場合は本線のほうを濃線化して示差性を持たせた。森は濃淡と長さを正確に書き分ける能力にたけていたから、この筆法が可能であった。

創案者、正親は中根式のアイデンティティを立案の方針において示した。そこでは、漢字で書く言葉はインツクキを逆記し、訓読の言葉は音読にかえてインツクキで簡単に書くことと宣言していた。この速記理論の方針を踏襲する限り、中根式の枠を越えることにならないというのが、正親の見解であった。ここにおいて、森は順記法に転換し、和語縮字法、線表象法などを創案し、クロスの表象理論を日本語上で具現化して中根式立案の方針を超越する次元に達していた。

京都で中根正雄から中根式を学び、森の研究とも身近に接していた古久保はクロス式の五段法を採り入れ、幾何図形の正円ダイヤグラムにとどまっていた単画派から脱皮する方向へ進む。正円に加えて手書き態ながら幾何楕円を導入し、基礎符号のすべてを純粋な単画符号の規範とする考えであった。古久保はのちに国字峯吉、常弘、さらには寿光と名乗るが、その研究の最終形を門下の山根祐之が完成した。また、中根系で仮名速記を確立する岩村学を含めて、新しい速記の分野を切り開く動きが京都を舞台にして盛り上がっていく。それらについても別項で取り上げる。

中根式においては[ウ], [ス], [ヌ], [ム], [ル]の基礎符号が長線で、かつ加点を伴っている点に疑問を持つ研究者が多い。森は1932年8月に改良案を「速記研究」8月号に提案し、浜田喜一は1933年4月に除点四種線（最大線）化の改正私案を明らかにした。正雄は中根式速記協会機関誌に長さ1ミリの最小線（一種線）を[ウ], [ス], [ヌ], [ム], [ル]の代字とする提案を公表した。

基礎符号について森は中根式を変更しない立場であったが、1931年に国字常弘は[ウ]の二倍線を[ク]、[ス]の二倍線を[ツ]、[ヌ]の二倍線を[フ]、[ム]の二倍線を[ユ]とする構成方針を確立し、その規則性は1951年の山根式に継承された。一方、土田は1934年、[ウ]の最大線（四種線）化、[ヌ]、[ム]への半円、[ス]への開口楕円の割り当てなどを内容とする土田式を著した。武部は、1941年版「学生速記」において、[ウ]、[ス]、[ツ]、[ム]、[ユ]、[ル]に45度曲線を中心に割り当てた新符号を示したが、[ヌ]、[チ]の加点符号、[ニ]、[ネ]、[ミ]、[メ]、[リ]、[レ]、[ワ]の濃線符号は残された。

一方、石村善左は中根23年式において基礎符号の改良を始めていた。それは中根系の国字式の影響を強く受けたもので、改良点は(1)濃線を廃止した、(2)幾何楕円の一部を取り出した曲線を[ニ]、[ネ]、[ミ]、[メ]、[ユ]、[リ]、[レ]、[ワ]8符号に配分したことである。そうして中根24年式においてさらに変更を加え、ついに中根26年式において大胆な改革を行い、同式をもって石村式が出発することとなった。

複画、折衷派では頻度の高い字音語等の音列に対して一筆で書ける二音文字を与えることが中心であった。それに対して、中根式は字音語の二音目に出現するインツクキ5音を縮記する普遍性のある理論を採用した。このインツクキ法の高度化面で、植田裕は順記法の採用などをはかった。香川県立高松商業学校で国語教師森一男から部活で中根式を学んだ植田は1947年卒業後四国新聞社に就職したが、母校の速記部を指導し、1948年の戦後第1回高校中根式速記競技大会において教え子、二年生の大塚都夫が分速400字を書いて優勝し、翌年も優勝して連覇を遂げ、さらに1953年から3連覇を実現する快挙をあげた。中根式の改良研究に没頭し、植田は四国新聞社を退社して、全国でも珍しい高校の速記教師となった。

基礎符号の変更案が盛んな一時代、植田は「カ行曲線タ行斜線符号」を高松商業高校速記部で指導した。その符号案は[カ]と[マ]、[コ]と[ノ]を入れかえ、[チ]と[キ]、[テ]と[ケ]の符号を入れかえたのが主な変更であった。図2-62Eは大阪市立西商業高校速記部が用いた「カ行曲線タ行斜線符号」で、巖正之が転校して創部した際に伝えた改良案である。[ヌ]が[ノ]に加点されているが、これが高松商業では[コ]に加点されている点が異なるが、数年後高商の基礎符号は元に戻った。

中根式において1文字前の位置に二音目の符号を繰り上げて置いて書く逆記法は、他方式から筆記上無理があると指摘されていたが、植田は、発音順に符号を書く順記法を導入して改善した。また、二線一筆化など画線のつなぎ目で筆を停止しないなど、書線の円滑化を図った。植田は、運筆法を改善しピットマンの幾何符号を離れて、グレッグ流の流麗な書線を万年筆で書いた。なお、下谷は逆記法を田鎖系がとる二音文字を生成する規則であり、筆記上の無理に結びつけることは合理的でないとする。

植田は1980年9月には同じサイン記号を多読化する「スミニヒカリシ符号」を設けて、サイン符号を複数に読み分ける方法を考案した。また、晩期にはZ記法と呼ぶ、字音語の音構造を対象とするV S O P (Vowel Vanish, Stroke Omit at Position)理論の完成などが

ある。V S O Pの発想は、直音+拗音など12種の音構成パターンを対象に、[上段]（イ・エ列，○ウの形の長音・拗音，イ・チ・キ尾音），[中段]（ヨウを除くウ列長音・シュ，ツ・ク尾音），[下段]（ア・オ列，オ列長音，ただしヨウを除く，シヨ，キヨ，チヨ，リヨ，キヤ，シヨ，チャ，ニヤ，ヒヤ，シヤ，ヒヤ，ン尾音）の三段に筆記帯域を分け，代表音の母音，長音・拗音，尾音の種類に応じて省画化した摘記略語を規則的に作り出す方法であった。

要するに中根式は，日本語における字音語の音構造の規則性に着目し，それら尾音の縮記式を設けて演繹的に適用する原則をとった。これにより，戦前の中学生でも，個人の原則応用型の努力によって高速度に達する平易な理論を強みにして中等教育段階の部活に普及した。植田は字音語の複合語には早い時期に特殊漢音縮記法を加えた。

学生速記出身者の稲垣正興は，新制高校における部活速記の普及並びに速記実務者の養成に貢献した。早期の研究面では植田と並んで独自にインツクキ法の高度化をもたらす特殊インツクキ法を開発し，字音語の複合語を省画化する応用性の高い高度理論を実現していた。例えば「経済政策」の場合，「政策」は初音「セ」を取り出し，「経済」の略語となる「ケイ」符号の周辺にある「ク」の筆記位置から「セ」の符号を書く，つまり「ケイ」+「セク」と書いて表す方法である。中根式の学習性のよさを拡張するアプローチがそれら研究の理想であり，稲垣はオーソドックスな理論を継承し，みずからの体系を「学生の速記」（1969年），「速記練習ノート」の教材として発行した。

門下の高橋立成（朝日新聞）は日本速記協会の関西高速度競技会（1961年）で第一席入賞を遂げたが，高橋が創部した関西学院大学速記研究部がその符号系統を継承してきた。同部では多様化する時代に合わせて左利き用の速記教科書を発行するなど，学生速記の継承者としてユニバーサル対応の教材の開発など有意義な活動を続けている。

5. 純単画派の完成

ソシュールの言語の第一原理が速記にも適用される。いかなる言語においても，発音と速記符号との関係は創案者の恣意によるものである。グレッグの符号の書きやすさは，正円幾何派一本で来たピットマン系統の日本語速記方式に大きな刺激を与えた。武部は，グレッグの書線を自然線と呼び，いち早く取り入れたのは国字式であったとする。

ここでは書字行為を右手で書く形態に限って考えることにする。国字式にはグレッグ式が掲げた原則に外れる点がある。すなわちグレッグがいう（1）濃淡を使い分けない，（2）直立の直，曲線を用いない，（3）右下方向へ進む直，曲線を避ける，（4）鈍角接合は一線化して，そのままの使用を避ける—などの禁則は守られていない。

グレッグが採用した線條はラテンアルファベットの筆記体であり，ドイツ草書派の符号観を踏襲している。一方，規範符号に幾何派の基礎符号を持つ国字式，山根式は，筆記体を規範書体とする半草書派ではない。両式の系統は，森の「現代国語表象法」を通じてク

ロス式の折衷式を取り入れたと見るほうがよい。例えば早稲田式が用いる〔ノ〕の規範書体はグレッグ式の〔L〕とは異質な価値観に基づくもので、図 2-75 に見るように、屈折語の欧米語と膠着語の日本語では筆記体の書き方が異なる。



図 2-75 グレッグ式と早稲田式の運筆の違い

後者の価値観は、日本語の文字書き習慣に対応した動態符号を用いる研究へ進んでいく。文字書き技能には可塑性があり、田鎖式が登場したときから日本語の書字特徴を織り込む筆法を自然に体得する者がいたが適応できない者もあり、手書き速記の学習には手続き記憶の一面があつて、佃式では速記独習不可能論を主張した。実際、幾何派の符号は綴りにくい組み合わせがあり、若林珮蔵ら優秀な者の筆跡をまねることが上達の近道でもあつた。

だが、速記が登場して半世紀がたつと、速記理論の研究が進んで、日本的な習字技能を前提にした速記符号、連綴法に注目する者が出現してきた。それは意識されなかったが、日本人が書きやすい線條の連なり、一定の崩れ方をさせる筆法、逆には用いてはいけない筆法を避けることが、日本語速記法においても、自然にこなされてきた。早稲田式の筆跡とグレッグの書体はそんな書字文化の違いを示している。

日本語においても、知識としての抽象的な静態符号は、速度を伴って現実に書かれるときに変化した動態符号となり、両者の関係を踏まえた速記符号理論が早稲田式などで研究されてきた。ことに、新しい概念の速記方式を構築するときに、過去の速記経験が肥料として働き、西欧の速記符号とは違った日本語速記法が生み出される。

その流れは「小型の精密な速記符号を崩れないで書く」という正円幾何派の書字態度から、今日では「大型の流暢な符号をのびのび書く」という筆記法へ変化してきた。言い換えれば西来路が求めた速記符号の小型化こそが高速化の条件とされた時代から、早稲田式、佐竹式のように速記符号の大型化が進んできた裏に、日本的な運筆の合理性への配慮が関係している。その流れから、純単画派のV式が生まれてきた。

一方、職業速記者の基本的な速記力としては、聞き慣れない音声を正確に聞く能力と、専門用語などを含んだ内容を理解する能力が求められ、かつ反射的によどみなく、絶えず 15～20 字程度遅れながらも符号を綴れる「ため書き」に熟達することが質のよい速記符号を筆記できると考えられるようになってきた。

6. 国字式の誕生

基礎符号の純単画化の実現に尽くし、多くの高速度記録型の速記者を養成した研究者に、古久保峯吉（国字常弘，寿光，1896.7－1967.5.19）と、その弟子の山根祐之がいた。

1929年、中根正雄が中根速記学校開設のために東京へ転じる際、古久保は京都成安女子学院の速記講師を正雄から任されたが、みずからの方式を創案する夢に挑戦し、1931年新しい体系をつくり上げた。

古久保が理想とした速記は、「発音動作と書記運動を一致せしめれば、発音と密接不離の文字ができ、[ア]の字となる。ここに一音一字一画の簡単極致の音文字ができる」と主張する、幾何派の一線一音節符号の体系であった。

その際、字音語の縮記法はキクイツ法を創案して発音順に速記符号を書く「順記」を原則とし、五十音符号には、正円図形に加えて図2-76のような「自然円」と呼ぶ手書きした楕円の一部分を取り出した曲線を取り入れ、濃線、加点のない完全な単画化を実現し得た。ただ、グレッグ式では図2-77のBの方角、Cの方角を用いない。

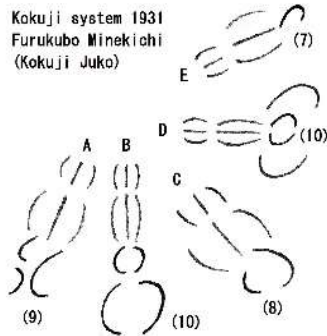


図 2-77 国字式の基礎符号の花

ここにおいて、古久保は中根式立案の方針を外れて国字常弘と名乗り、国字式が成立した。古久保は幾

何派において手書きながら正円と楕円を用いる世界で初めての符号パラダイムの門を開いた。

国字式の隆盛期について武部は「普及は積極的に進んだ。その努力が実り、関西地方を中心に広く行き渡る存在へと発展した。後に日本速記協会が大阪で認定試験を行うに至ったのも、国字学塾の尽力によるものだった」と日本速記百年史に書いている。

また、古久保は、森が最新の理論方式と考えていたクロス式から新理論の研究を取り入れた。森の影響を受けて古久保が導入したのはクロス式の5段の筆記ゾーンを用いる着想で、体系の転換を終えた時点で国字寿光と改名、方式名を寿光式と改めた。しかし、クロス、森、古久保の符号観は山根式へは伝わらなかった。

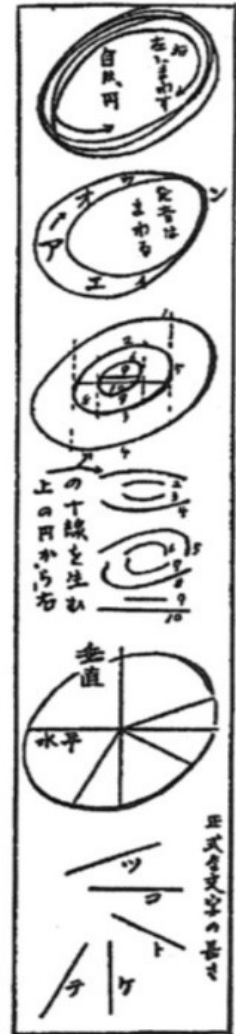
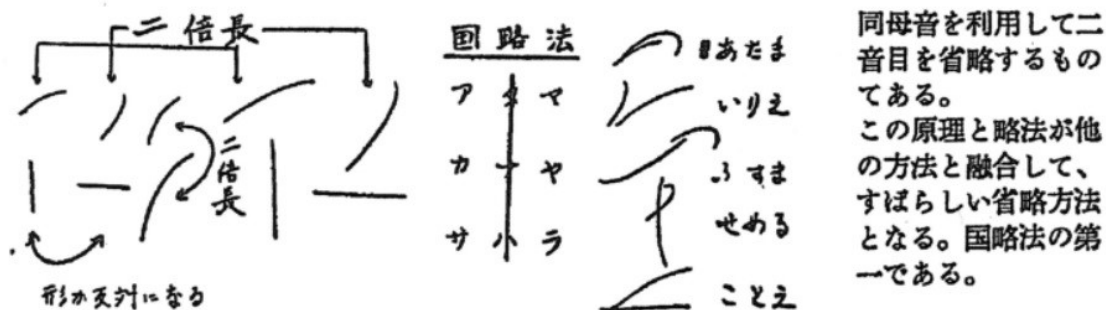


図 2-76 国字式の符号生成ダイアグラム



同母音を利用して二音目を省略するものである。この原理と略法が他の方法と融合して、すばらしい省略方法となる。国略法の第一である。

国語省略法第二種	天..ア..カ..サ..タ..ナ..ハ..マ..ヤ..ラ..ワ..	○	一音語	○○○
	上..イ..キ..ン..チ..ニ..ヒ..ミ	○と□		○○○と□
	中..ウ..ク..ス..ツ..ヌ..フ..ム..ユ..ル	○ □□		○○○ □□
	下..エ..ケ..セ..テ..ネ..ヘ..メ	イ	ブクロ	アタマ ゴナシ
	地..オ..コ..ソ..ト..ノ..ホ..モ..ヨ..ロ	○○		その他
	国略、日本語中漢語系にあらざる省略法にして	○○と□		ウゴメク
	同母音語、異母音語、国略法第三種などあるがあ	アサ	オキ	ウズクマル
	わせてンイ法、ニ法、テ法、モ法、ヤカ法の使用	○○ □□□		アキタラナイ
	によつて、ほとんどすべての国語系は簡単に法則			
	化することができる。			

図 2-78 国字式寿光速記法の五段法

古久保は「国民を文字のドレイより救え！」とする師、中根正雄の速記普及精神を体して国字と改名し、考案した速記符号を日本語の文字にしたいとの理想に燃えた。新方式の発表は毎回、紀元節の祝日に行っていたが、理想を古久保は発音動作と速記の筆記運動を一致させることに置いた。符号の源図として四分円の第一象限から第三象限へ向かう楕円運動と直線を採用し、その中から線分符号を取り出した。符号要素の楕円を自然円と呼び、基礎符号の線長は長短2種、角度は5種とし、出現頻度と書きやすい符号要素を対応させた。

国字式の理論体系は、大和文字と呼ぶ基礎符号と、国語省略法（第一種、第二種、第三種）と漢語系省略法などで構成している。図 2-81Aのように、国字式の基礎符号はア列の二倍長をエ列、ア列曲線を反転させたり、対称的な角度に傾けた符号をイ列とし、イ列の二倍線をオ列、そのほかウ列符号はア行とカ行、サ行とタ行、ヌ行とハ行、ム行とヤ行、ラ行とワ行の関係で二倍線化させる規則的な対応をとった。

国字式における国語省略法の第一種は、対象の語が同母音であることを利用して2音目を省くもので、線分符号の周囲の位置（各行分9箇所）で表象する音の行を指定して、例

例えば「頭」を [ア] と [マ] の符号を重ねて表したり、「入り江」([イ] と [エ]), 「ふすま」([フ] と [マ]), 「攻める」([セ] と [ル]) を筆記する。図 2-80 の文例の 3 行目「破壊」では, [ハ] の周辺の [カ] の位置から [イ] を順記して書いて [カ] を省いている。

第一字	一字	長音	拗音	拗ク	拗ツ	拗ン	キ	ク	イ	ツ	チ	ン	
第二字	略号	そのま	5ミリ	上段	上段角	上段空	天段ハネル上段	交差	角ク	短長字	空	平行	天段
一字	そのま	伊ノ	厚意フ	趣味	着衣ノ	出荷	瞬時	責務	宅地	会期	国家	日夜	暗夜
長音	5ミリ	伊藤	高等	窮乏	囑望	出頭	準用	適合	国宝	該当	鉄道	日曜	敢行
拗音	左右水平	依抛	空中	強調	職業	出場	准将	開所	拍手	最初	撤回	日常	品種
拗ク	左水平	衣食	到着	教職	着色	出色	殉職	激職	特色	拝借	圧縮	七色	先着
拗ツ	左右空水平	輸出	口述	救出	百出	演出術	回春術	摘出	学術	歳出	傑出	ヒツシュツ	剣術
拗ン	ハネル天段	基準	早春	従順	着順	出順	逡巡	席順	悪循環	青春	一瞬	一巡	因循
キ	左右空中央	儀式	攻撃	収益	直撃	出席	巡歴	辟易	悪癖	愛惜	鉄壁	一力	陰曆
ク	角空交中央	威嚇	合格	收穫	囑託	術策	純朴	石墨	獲得	快速	合作	一目	干拓
イ	短長左右下	起債	総会	照会	触雷	述懐	俊敏	激励	団体	声明	逸材	日米	安定
ツ	空角交中央	季節	応接	疑結	執達	出発	春雪	激烈	確立	解決	発達	一律	観察
チ	空角交中央	喜八	好日	初日	百日	客待	順一	多幸子	幾日	対日	勝一	二	緑日
ン	左右天	仮面	高見	習慣	職員	出版	瞬間	責任	国産	院外	決戦	日限	安心

図2-79 字音語速記符号の符省法(国字式寿光速記法の例)

「日本の速記」1958年4月号から

同第二種は, 天(ア列), 上(イ列), 中(ウ列), 下(エ列), 地(オ列)の五段において, 同母音語, 異母音語, 国略法第三種などに応じて, 「ンイ法」, 「ニ法」, 「テ法」, 「モ法」, 「ヤカ法」を用いて和語を規則的に処理する。

一方, 漢語系の符省法として日常使用語 5 万語の音列の構成関係を分析して第 2 音に [キ], [ク], [イ], [ツ], [チ], [ン]のどれかが出現する特徴を導き出した。この性質と第 1 音との関係に応じて 144 通りに応用できる 25, 000 語余に適用して一筆化できる省略法とした。それは (第一字) [一字], [長音], [拗音], [拗ク], [拗ツ], [拗ン], [キ], [ク], [イ], [ツ], [チ], [ン] × (第二字) [一字], [長音], [拗音], [拗ク], [拗ツ], [拗ン], [キ], [ク], [イ], [ツ], [チ], [ン]で形成される文字列であった。

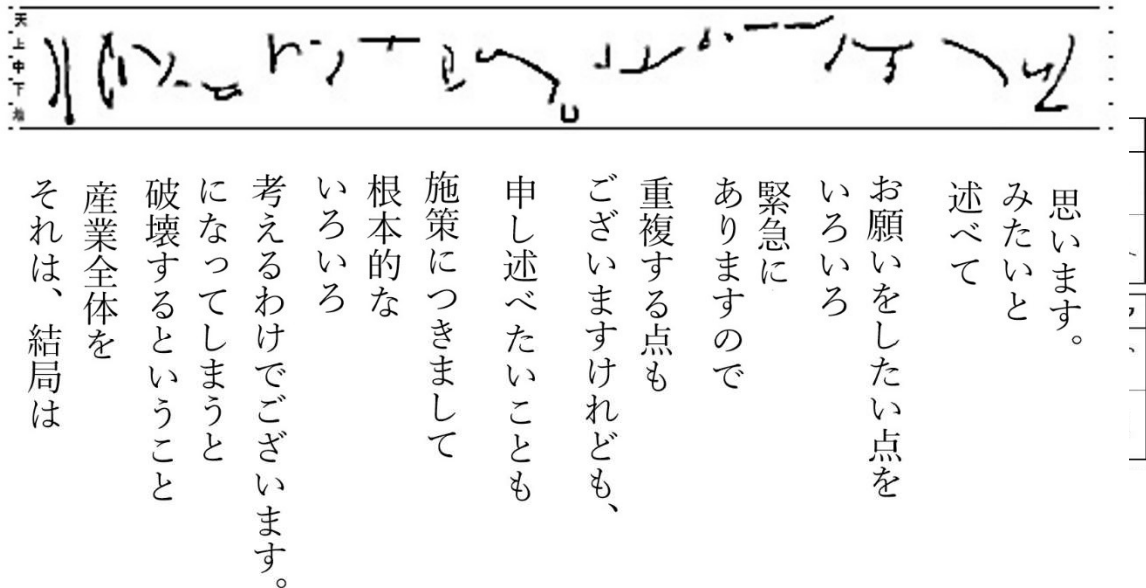


図 2-80 国字式寿光速記法の五段法による文例 国字寿光（古久保峯吉）

古久保は、寿光式の創案の目標を①正、②書きやすく、③読みやすく、④しかして簡単であること、がその構成の必要条件であり、⑤しかも美的にして品格が高ければ理想的である——とした。

京都の地では、中根、森ら独創的な知のリーダーの啓発を受けて国字式、岩村式、米田式が育った。基礎符号における単画化比率は、国字式、山根式で100%に達した。

		アイウエオ	カキクケコ	サシスセソ	タチツテト		
A	国字式 1931 国字寿光						
B	山根式 1948 山根祐之						
		ナニヌネノ	ハヒフヘホ	マミムメモ	ヤユヨ	ラリルレロ	ワ
A							
B							

図 2-81 国字式と山根式の基礎符号

注：両式の基礎符号は必ず中心線から書き始める
兼子次生整理

7. 山根式の創案

1931年から古久保は大阪市浪速区桜川の国字速記学塾の本拠で国字式速記法の教育に当たり、旺盛な速記需要に応じて西日本有数の規模に成長させていた。1938年から山根祐之は2年間、国字式を習っていた。太平洋戦争が激化する中、古久保は五段法を用いる新式「寿光式」の研究に乗り出したところ、大阪の国字速記学塾が戦火にあって教科書等すべてを焼失し、寿光式への切りかえを決断した。原爆投下で終戦を迎え、直ちに郷里広島へ帰り「寿光宝典一」をまとめたのは1948年2月、全体が完成したのは1953年であった。

山根祐之（1910.6.29－1995.3.2）は、古久保から国字式の教育に従事する許可を得て1946年12月大阪市都島区の国鉄淀川駅前に国字速記塾の支所として山根速記塾を開いた。1948年から山根は学んだ理論に飽き足らず改良に取り組み、書きやすく、中学生にも学べるとする平易、合理的な符号を求めて先行方式の長所を採り入れながら整然とした体系を整えていた。それは「従来の国字式とは大いに異なっている」と自信に満ちた理論であった。

しかし、寿光式が完成すると古久保から全面切りかえを求められ、山根は五段法初め旧式と異なる寿光式に困惑しながら、それは符号観に混乱が生じると見て、山根式の立案を視野に入れて猶予を求めた。その間、古久保の許可を得て1950年には旧式「国字速記」No.1,同No.2を発行し、国字式を教え続けた。兵庫でも高弟豊岡敬人が教室を開設した。

そうして山根式の研究を開始し、3年がかりで1951年に完成していくことになる。

一方、古久保は1946年から寿光式の講義プリント、寿光宝典などの教本を整備しながら広島で指導を始めていて、一式二符号の混乱を避ける方針から山根に新式転換を急ぐように強く求めた。しかし、煮え切らない山根の回答に対して事態の解決を急いだ古久保は著作権を根拠に山根に国字式、山根式の指導禁止、あわせて著作権を根拠に山根式の教科書発行差し止め、1952年以降停止されている山根からの納入金の支払いを求めて法的な解決を求める挙に出た。椎名靖とともに山根弁護に立った瀬戸豊は「師弟間の争いは結局7年がかりで1961年に和解した」と自伝（「速記百年にんげんばんざい」p126）に書き残している。その間、山根は都島区都島北通に山根速記学校を新築し、1956年5月20日には大阪府知事認可となり、大阪山根速記学校と改称している。

山根が事態打開のためやむなく選んだ新方式では、長い指導で感じた体験に基づいて、基礎符号は、図 2-81Bに見るように学びやすさの視点から表音体系が見直され、符号群が横に流れるイメージへの転換を目指した。山根の理想は基礎符号から高度理論の体系へ一貫して至る点に置かれ、国字式をくまなく見直して緻密に組み立てた。その原点として、符号観について、自然円と称して手書きの楕円を使用する国字式が楕円符号の連続に崩れを生じたり、書きにくいケースがある点を解決するため、幾何的な正円形と楕円形を規範符号とし、書き方の規範筆記法をとる方針をとった。ここにおいて、山根は基礎符号に静態符号を用いることになり、幾何派の正円楕円折衷が登場した。

法廷における速記方式の新規性、進歩性の評価は「山根式符号には国字式符号と同一符

号及び異音同形のものを含んでいる顕著な類似点のあることが認められるが、基本符号を全体として考察すると、縦直、曲線は運筆上不便であるため、被告においてこれが使用をさけたものであると認められ、原告の独創性にかかるものといえないことを考慮すると、偽作というにあたらぬ」（昭和 32 年（7）第 306 号違約金等請求事件判決文）と書かれている。そして古久保が求めた著作権侵害については、山根式の教本には国字式の教本にある内容をもとに説明しており、これが「出所を明示していないから、正当な節録引用に該当せず、偽作」（同判決文）とし、国字式の教本を無断で模倣しており、今後も原告の著作権を侵害するおそれがあるため著作権侵害であると判断した。その結果、判決文では、「被告は山根式速記講座①②③を発行してはならない」とした。

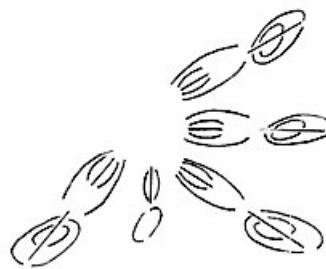


図 2-82 山根式の基礎符号の花

山根式立案の戦略方針は①基礎符号は言葉の頻度と発音の頻度の高いものに、例えばアカタハ行に流れのよい線を配分する、②将来の省略法体系とその運用する符号形から逆算して基礎符号を決定する、③熟語の簡略化よりも音の簡略記法を目指す—こととした。

1951 年発行した山根式教本において、かくあるべき基礎符号が示されたが、その規範符号は静態であり、速度要素を持って書かれる動態符号の書き癖、崩れを許さないものとなった。そのため、楕円、正円、直線の綴り方を詳しく教材に挙げて、図 2-83 の第 1 図のように「公差」つまり方変の差の程度を詳しく解説した。とりわけ正円、楕円、直線を正確に書くために、山根は中根式から始まる字音語の尾音縮記法のキクイツチンの運筆法を詳細に定義して綴り方の規範化をはかった。例えば関連法には/イ/の書き方として(1)頭音のほか、(2)第 4 図②「イン法」にある「委員」の「員」の例、(3)同③[ンイ法]にある「引退」の「退」の例、(4)同④「イ拗法」にある「解消」の例書き方——などが示されたほか、図 2-83 第 2 図④の「イ長略法」に見られる「解答」、「声望」のような独特の筆法が設けられた。

学習者に規範符号の姿、規範運筆法の定着を習慣化させるために、基本となる基礎音の組み合わせを徹底する練習法をとった。その目的は、速く書くよりも、正確に書くことを徹底する初歩教育である。そのため、規範符号の測字器を用いて矯正が課された。

山根式の理論体系では祖系中根式、父系国字式の影響を受けて、速記法の書記規則を法則と呼び、山根式では①撥ね、②流し、③縮字、④加点、⑤公差、⑥接頭、⑦接尾、⑧順逆、⑨段位、⑩反語、⑪名詞、⑫漢語、⑬和語、⑭後略、⑮数詞、⑯関連、⑰大文字の 17 法を体系化した。その運用技能面では、基礎符号の鈍角接合を避けて鋭角化と変化による書速向上（図 2-83 第 2 図④）、反訳の能率化を挙げ、書き崩れしない筆記に慣れるために 2 文字を連続練習する 1936 法を設けた。同法は/アア/、/アイ/、/アウ/のように基礎符号を 2 個ずつ連続すると、44 字×44 字で合計 1936 組の接続形になるので 1936 法と呼ぶ。

速記符号の書き方理論面では、図 2-83 第 2 図「イ音ン音拗音・イ長略法」の関連で①「長長（長音と長音）の略法」：2 音目の符号の頭部を交差して符省（符号省略）する，②「ン長略法」：「ン」の右上ハネにこだわらないで，長音は頭部交差する，③「拗長略法」：拗音小カギをつけて，「長長法」にならう，④「イ長略法」：「イ」の大楕円と長音の小楕円を合して特大円として字間に位置する一を設けたとする。

方向図

公差、角度差の融通を認める

公 差
カケ、ワク、スツ、ヌフ、ムユ
キコ、サセ、シソ、マメ、ミモ
チト、ナネ、ニノ、ハハ、ヒホ

公 差
アエ、イオ、タテ、ラレ、リロ
ヤ、ヨ、ル、ワ

(※内は文字の長短比)

基本文字

濁音 濃縮化
カク、ク、ケ

長音 字尾小楕円添付 字間変形自由
カー、サー、オート、ケー、ユー

拗音 字尾右上撥ね 字間右上空
アン、イン、アンイ、ハンタイ

拗音 字頭小カギ
シャ、シュー、シュ、ショー、ショ

社長、写経、交渉

第2図 イ音ン音拗音・イ長略法例

長音略法の例 イ音の長音化(音便法)を含む

①長長略法 空港 が となる。
横行 構想 相当 傍系 傾向 猛攻 要望

②ン長略法 運行 が となる。
相当 関係 憲法 混同 戦争 南欧 奮闘 陸考

③拗長略法 強硬 が となる。
急騰 供給 許容 少壮 初等 調査 中央 流通

④イ長略法 会合 が となる。
解答 成功 対等 抵抗 配合 声望 台風

第3図 長長関連法

	原型	第一関連法	第二関連法	第三関連法
関連法	平衡	平衡交付金	平衡交付金制度	
	健康	健康保険	健康保険制度	健康保険組合
	参考	参考人	参考意見	
	憲法	憲法問題	憲法改正	憲法改正問題

第4図 イ音略法の例

イ音略法 二音目以下のイ音は字尾大楕円添付 字間の変形は自由

①基本例
かい さい たい ない はい まい
海貨 計算 配下 会議 来意 全体

②イン法 委員 サイン ナイン バイン 上院と
イ ン イ ン イ ン

③ンイ法 引渡 関西 信頼 反対 調令 文明
イ ン イ ン イ ン

④イ拗法 哀愁 閑業 解消 軽率 監査 名称
イ ン イ ン イ ン

図 2-83 山根式の速記理論概要図

さらに⑤「ン拗法」では (a) 「ン」をハネて着地したと思われる位置から次線を書き出して「ン」を符省，(b) 「ン」のハネを利用した逆カギ法では「拗音カギ省略法」，(c) 前字を利用して「ン」のハネとカギを符省する，⑥「イン略法」では (a) 前字脚部から「ン」を書いて「イ」を符省，そのほかの方法では⑦「順逆法」として (a) 線分符号の上側，右側を順側，反対側を逆側と決めて，動詞型の「ラレ」，「カレ」等の受け身型を順側と決め，反対の逆側を「シメ」，「サセ」等の使役語を表す方法，(b) 「ラ行省略」：2 音目以下に来るラ行音を下段位において符省，⑧流し法を設けて，述部部分の多様な表現を，

前字を利用して簡潔に書く方法なども加えた。

古久保峯吉の死去により国字式の教育は途絶えた。また山根祐之の死去により山根式の普及活動は終了して、山根速記学校は同年8月大阪府が認可を取り消して閉校した。山根式を継承するのは、関西大学文化会速記部だけとなった。

8. 石村善左の符号研究

石村善左（のちに禧行と改名。1916. 3. 9—2009. 11. 28）は1949年、石村式の第一歩となる中根24年式の改良案を完成し、さらに1951年に中根26年式へと改良案を重ねた。1958年1月に石村は「私は現在の案を得るまでには、1940年以来基本文字だけでも50を下らないほどの改訂を行った」と回顧している。石村は生涯にわたり、確認できるところで18版、97回基礎符号の変更をしている。図2-84に主要な符号変更の例を挙げた。歴史的に見ても、世界の速記符号研究者で、速記実務を行いながら、これほどの回数の符号変更をした者はいなかったであろう。

石村は旧制福岡市商業学校在学中に中根正雄の速記講演を聞いて、独習で中根式を学んだ。1932年第1回全国中根式速記選手権大会で優勝するなど伝説の選手として知られ、福商速記部を育てて、石村善右、善左（禧行）、善兵衛、善助、善治の5兄弟はいずれも優秀な速記競技選手として活躍した。

同時に石村は、速記符号とその書法について自身の速記線の理想像を描き、合理的な表音思想と幾何符号の調和を求めて好きな線と書きよい線の体系化を求め続けた。ねらいとしたのは、書きやすさ、綴りやすさ、学びやすさの改善であった。

戦後の中根式速記協会の中根式標準符号制定委員会において、石村は中根式研究の命題として(1)基本文字の濃線廃止、(2)(逆記を行う)インツクキ法の再検討、(3)二音目にあるインツクキの省略一を挙げた。

そして幾何派の基礎符号資源を広げる方法として中根系国字式で自然線と呼ぶ幾何楕円の一部を活用する発想に着目し、10符号を変更した。これが早期に公開した中根23年式の符号であった。

石村はグレッグ式の速記線を理想としたが、ただし画線の中でグレッグが避けた縦90度、右下への下降線を改めず、また縦のずりを問題と見ずに対策をとらなかった。

中根式立案の方針の境界線を越えた1951年には、一旦公表した「中根式26年式」を「石村式」と変えて、中根式から離れた。

一般に基礎符号を変更することは大変なエネルギーを要するが、石村は天才的な適応力を持ち、半草書派、幾何派理論を融合し、幾何派の書きにくさを改善するため日本的な連続運動を重視した線イメージを追い続けた。その前提にある石村の速記線観を解明する必要がある。

中根正雄はそうした石村と終生、師弟関係を温めた。

石村は優れた速記適性を備えており、基礎符号を 1948 年から 2000 年までに 18 版を改訂した。定説の石村式初版となる中根 26 年式では五十音符号の 90.9%が変更される大規模な変更だったが、離陸定説とされる中根 24 年式の前年に中根 23 年式を実施していたことが発見され、8 基礎符号 18%を変更して正親版、正雄版に続く中根標準式を目指す動きを進めていたことがわかっている。主な改訂は 1958 年、1959 年、1963 年、1968 年、1973 年、1988 年などに見られた。

石村式における基礎符号改定を数えるベースとして、基礎符号は清音 44 音に撥音 1 を加えた 45 として数えた。多い順に変更した合計回数を見ると、8 回が [ヌ]、[ム] 2 符号、6 回が [ネ] 1 符号、5 回が [ウ]、[ユ] 2 符号、4 回が [ヤ]、[フ]、[ああニ] 3 符号、3 回が [ク]、[タ]、[ミ]、[ル]、[ロ] 5 符号、2 回が [イ]、[エ]、[オ]、[カ]、[ス]、[ツ]、[ノ]、[ラ]、[ワ] [ン] 10 符号、1 回が [ア]、[コ]、[サ]、[シ]、[セ]、[ソ]、[チ]、[テ]、[ト]、[ナ]、[ハ]、[ホ]、[マ]、[メ]、[モ]、[ヨ]、[リ]、[レ] 18 符号、中根式時代から変更がなかったのは [キ]、[ケ]、[ヒ]、[ヘ] 4 符号であった。

一般に符号素材用の図形資源は有限であり、理想的な配分が難しいため、音韻、音列の出現頻度と連続関係、筆記能率の効率、連続条件の相性などから基礎符号の設計を判断せざるを得ない制約があり、改良者、創案者の速記線イメージが重要な判断要素になっている。その裏に基礎符号配分の満足度が相対的なものであり、満足できない符号の入れかえに創案者の線嗜好が関係していると見られ、石村の変更歴は速記方式研究における基礎符号の選択動機を解明する上で意味がある。

明治時代の創案者、改良者は、英文速記の方式書を入手して日本語の速記法を設計する際、英語の音声と速記符号の関係を参考にして日本語に当てはめた。その合理的関係は科学的な根拠を持たなかった。日本語の音声や言語学的な知識体系と関連づけることは試みられたものの、むしろ研究者は手にした速記符号をどう改良するかに興味を持った。

日本語における、母音の比率を見ると、大西雅雄「語音頻度より観たる十カ国語の発音基底」において、a 母音 15.96%、o 母音 12%、i 母音 10.59%、u 母音 5.57%であるから、ア列を重視する田鎖系のア列父音の単画は有効であるように見える。

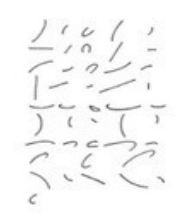
一方、今栄国晴「日本語の diagram の相対的頻度とその特性」では



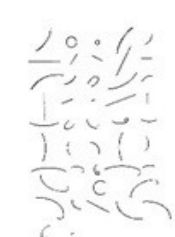
1949版



1951版



1957版



1962版



1967版



1973版

図 2-84 石村式
の主な符号
改訂表

上位 10 音節として①「イ」(4.7%) , ②「ウ」(3.8%) , ③「ン」(3.3%) , ④「ノ」(2.9%) , ⑤「カ」(2.8%) , ⑥「タ」(2.7%) , ⑦「ト」(2.4%) , ⑧「シ」(2.3%) , ⑨「オ」(2.3%) , ⑩「テ」(2.0%) とする。これらが前後合わせて 3 音節でどのような音列を形成するかを見て、基礎符号の配分を計画することができる。

研究者が持つ基礎符号改変の動機は、「理想的な線構成の実現」が大きい。石村の符号変更を見ると、0 回の[キ], [ケ], [ヒ], [ヘ]や、1 回変更の 17 符号についてはベストセティングされたとみてもよい。使用頻度が高いものほど書きよい符号を配当するので、変更回数が 0~3 回程度であれば基礎符号が適応したものと見ることができる。一方、上位回数では 8 回変更が 2 符号、6 回変更が 1 符号であり、出現頻度はそう高くない音、かつ良線を配当するゆとりがなく最適解を得ていない符号であると理解できる。

石村式 石村善左(禧行)

政府としては昭和三十年度において十四億三千万ドルの輸入を予定しております。

(1)

県財政の赤字克服策を中心に、その他教育、町村合併などの諸問題について若干の質問を試みんとするものであります。

(2)

今年度の補正予算で計上する計画は立っておると言っていたじゃないですか。

(3)

電力事情が著しく悪化したので生産量が低下したということでありましょうけれども、それは一時的な現象に過ぎないと思います。

(4)

知事が真に人件費の増大を懸念して善処しようとする熱情を持っておられるのなら直ちにその対策を示されたい。

(5)

文例3の3つ目の符号群、同5の3つ目の符号群に縦ずりが認められる 兼子次生コメント

不思議なことに、基礎符号をこれほど変更しても、石村が綴る符号のイメージは変わっていない。それは筆記者に内的な速記符号イメージがあり、心的な符号の筆記態度ができ上がっている場合、画線運用の構成イメージが存在するように受け取れる。見方によれば、筆記習慣により、実行する個人の好きな線、書きよい線が定着していると感じられる。

一方、岩村から刺激を受け、石村は 1941 年には岩村式カナ速記の講座を受けたのち、速度練習に励み、1944 年 8 月に 10 分間 2,800 字の技能に達した。そのあと、岩村式の単画符号化を実行、全面的に変えた方式で 3 カ月練習し 10 分間 3,500 字に到達した段階で、衆議院の採用試験を受けて 55 名中 2 位、参議院の試験でも 60 名中 3 位の成績で合格した。これは石村の内的な画線筆記のパターンが完成されていることを示唆しているようだ。

図 2-85 の速記符号文例の 3), 5)

図 2-85 石村式の文例

に見られる垂直のずりは幾何派の欠点とされる線の組み合わせであるが、石村は苦もなく書きこなしており、方式を変更して最高速度へ達するのも非常に早かったことも前人未踏である。

石村は、次のように基本符号研究の結論を書いている。

しかれば、いかなる基本文字を理想と考えたか。

- 1) 基本文字はやはり純単画（加点，濃線等を含まず）がよいと考える。ただし単画の欠点は極力是正し，折衷，複画の長所は取り入れる，
- 2) 無意味な構成原理，より重要な構成原理にとらわれて，より重要な要素（頻度・運筆・方向等）を軽視してはならない，
- 3) 長短の差はなるべく二種までとし，長短の関係は似た音同士とする。似た音には似た線を使ってもよい，
- 4) 基本文字の中にできるだけ縮字法の要素を含ませ，基本文字を覚えたら縮字法の大半を一緒に覚えたことになり，別に複雑な縮字法を覚える必要のないように基本文字を工夫する，
- 5) 単画基本文字の欠点の一つは覚えにくいことであるから，できたら既習の普通文字に関連を持たせる，
- 6) 基本文字はできたらなるべく一通りがよい。最初から幾通りもあることは生徒が選択に迷う。

さらに，縮字・略字については，

- (1) 方向を一貫させ覚えやすくする，
- (2) 濁音表示法を工夫して，スピードを落とさず，かつ明瞭で読みやすい符号とする，
- (3) 基礎の縮字法を覚えて，いきなり使用頻度の少ない，覚えにくい略字を覚え込ませることなく，覚えやすく使用頻度の高いもののみで，中級文例，中級略字を選定し，むりなくこれに導入する，
- (4) 略字は，一符号一字主義で，前後の判読に頼らなくでも読めるようにする，
- (5) 略字は，特に方向，運筆を考え，右下に下がる線等多くならないように作成する，とした。

9. 小西佐都志と長商式

早くから石村の影響を受けたのは、小西佐都志（1920. 2. 22－2006. 4. 14）であった。中


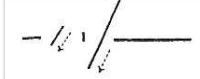





	アイ ウ エ オ カキク ケ コ	サシ ス セ ソ	タチ ッ テ ト
長商式 1953 長崎市立 長崎商業高校速記部 小西佐都志			
ナ ニ ヌ ネ ノ	ハヒフ ヘホ	マミ ム メ モ	ヤユ ヨ
			

図 2-86 長商式の基礎符号 1953 小西佐都志

根式の小西は母校名を冠して 1953 年長商式速記法を創案した。

小西は 1933 年、旧制長崎商業学校の 2 年生で中根式速記法の学習を始め、旧制長崎高等商業学校に進んで速記部を創設している。長崎高商を卒業後、大陸で夢を追ったが、敗戦後故郷に復員した。家業のかたわら、1949 年 4 月、県下で初めて県立長崎第二商業高校に速記科が設けられた際、速記教育に身を投じ、1951 年県立長崎商業高校に選択科の速記科が置かれた際にも講師を引き受けた。1956 年には方式名を長商式と名付けた。

図 2-86 のように、小西の基礎符号は中根式の基礎符号にある加点符号と濃線符号を廃止し、衆議院式単面理論の一部を導入した。その際、

石村の中根 24 年式の影響を強く受けたとする。また、西来路「衆議院標準速記法原理」の省略法理論の理念を中根式に適用して縮記法、略記法を整えた。

例えばある符号の周辺位置に意味を持たせて省画化をはかる空間利用省画法や位置省画法、加点省画法（図 2-87）を設けて、漢字音を主とする手法を組み立てた。長商式は 1953 年に完成した。さらに研究を続けて 1978 年 5 月に日本語の速記法を強化して英語も書ける英語速記法を公表し、1996 年には「日英同時速記法」を出版した。



図 2-87 長商式の加点法